

刊本『鍼灸五蘊抄』について

岩田源太郎

日本鍼灸研究会

『鍼灸五蘊抄』（以下『五蘊抄』と略称）は、江戸中期初めに田中知箴（知新）によって著され、中村元道（伯綏）の編集を経て延享2年（1745）に初刊された漢文体の鍼灸書である。本書には刊本以外にも、多くの写本が伝存するが、広く流布したという意味でも刊本の持つ意義は大きいと考えられる。よって、本書の研究においては、まず刊本の検討を行い、その後に写本に及びたい。検討には武田科学振興財団杏雨書屋所蔵本（乾3595）を用いた。

刊本『鍼灸五蘊抄』は、5巻全73葉の横とじ本1冊で、巻頭や巻末、版心の書題は「鍼灸五蘊抄」であるが、題僉は「（新編改正）鍼灸五蘊抄」とある。著者序（貞享2年〔1685〕）と編者序（延享元年〔1744〕）が附されているが、著者序は「五蘊抄序」、その序文中にも「題して五蘊抄と名づく」とあるから、原書名は「五蘊抄」であった可能性がある。この「五蘊抄」の由来について、編者序では、各巻の冒頭に、天地の間、万象森羅を表す「東」「南」「西」「北」「中央」の五方の文字を掲げていることに由来すると述べている。本書の来歴は両序に詳しい。それによると、田中知箴は、同郷（西京）の鍼術家で妙鍼流の松沢氏に入門し、15年にわたり学んだ内容を「五蘊抄」としてまとめ、それを小中村氏に譲り、40年余り秘蔵の後、延享年間に至り刊行したとある。

本書の構成内容は、大きく〈病證と選穴〉部分と〈兪穴〉部分の二つに大別することができる。〈病證と選穴〉部分は、第1巻に63門、第2巻に86門、第3巻に96門（内、婦人24門、小児7門）、第4巻に115門、第5巻に23門の計383門（ただし重複する病門が複数見られる）からなり、〈兪穴〉部分は、第5巻中に「五蘊抄兪穴」と題して169穴とその取穴法、禁鍼穴28穴、孕禁穴42穴、禁灸穴42穴、並びに四華と患門の取様（『類経』より図の引用がある）で構成されている。

〈病證と選穴〉部分は、短く病證名を挙げ、その後に穴を載せるという簡単な形式を採っている。病門の配列は、中国由来の配列とは全く異なっている。1病門あたりの選穴数は1~18穴の範囲内であるが、概ね2~6穴が多い。施術方法は、鍼灸両術が用いられている。鍼については、刺入深度（1, 2, 3分）、刺法（大刺、深刺、直刺、上向刺、巨刺）、手技（補瀉、取血）、鍼の種類（細鍼、三稜鍼）が、所々の穴の下に書き込まれている。灸についても同様で、穴の下に施灸数の指示（1, 3, 7, 13, 100, 200, 300, 年壯、急可灸、不絶可灸）が散見する。

〈兪穴〉部分は、穴名を挙げ、その下に取穴法を漢字仮名交じり文で記載している。著者序の冒頭に「不佞、童たりし時、経絡に志あり」とあるにも関わらず、経絡の記載は一切見られず、また穴の配列についても、経絡や部位などを考慮せず、無秩序かつ乱雑に並べられている。奇穴は、〈病證と選穴〉部分にも数穴見られるが、ここでも魚尾、魚腰、泉生足、鬼当などが取り上げられている。

診断については、第3巻に面色（1箇所）と脈状（遅、浮、沈、浮大、沈細）の記載が見られる。

本書は、〈病證と選穴〉部分や〈兪穴〉部分における穴の配列順序や、同名の病門の重出などの点から見て、内容が十分に校訂整理されているとは言い難い。ただ、部分的には類似する病證が集められていたり、巻を追うごとに病證が複雑かつ詳細になったり、選穴や手技への指示が増えている事から、何らかの編集の意図はあったと思われる。